

泉鏡花「化銀杏」論

——世間・殺意・自閉性——

市川祥子

「化銀杏」の主人公、お貞は幼い時に父を亡くし母も不貞のために家を出され祖父と二人で暮らしていたが、その祖父が病み付いたため泥棒や看病の心配もあり（内の緊りに）というので親戚の決めた相手と結婚をする。その結果夫とは打ち解けることができず嫌悪は日増しに募り、心に芽生えてきた「死ねば可い」という思いに苦しめられ、ついにはそれに突き動かされるように夫を殺し発狂する。「化銀杏」の発表は明治二十九年二月。娘が家を守るために、そうでなくてもより上層の家と姻戚関係を結ぶために親の定めた男性と結婚をし、そのために夫とは馴染めず不本意、不満足な生活を続け、愛のない結婚のために夫は放蕩を尽くして妻を冷遇するが女性の側からは世間体や経済的困難や実家への遠慮もあつて離婚に訴えることもできず、できるのは諦めること、ひたすら耐えること、精神を破綻させること、自ら命を絶つこととなれば当時の小説に頻出する女性の不幸の物語である。「化銀杏」にも芳之助の自殺した姉、お蓮のエピソードとして次の一節が挿入されている。

要なければ茲には省く。少年はお蓮といへりし渠の姉が、少き時配偶を誤りたるため、放蕩にして軽薄なる、其夫判事なにがしのために虐遇され、精神的に殺されて入水して果てたりし、一條の惨話を物語りつ。

お貞をめぐる本筋には直接関係がないための省略と断つてはいるが、このエピソードはこうして概略を伝えただけでも十分に想像が付くだ

けの当時しばしば見受けられた内容であつたと考えることができる。

一方お貞は同じく家のために結婚をしてはいても事情が異なる。お貞は夫の時彦に（あんまり深切にされるから、もう嫌で、嫌で、ならない）のである。お貞の悩みとは、時彦が東京から毎月自分の写真を送ってくるような行動が「深切だ」というよりは「執着い」ことであり、自分の病気に際して（何故一所に死ぬとは言つてくれない）と求めるような愛情が「執念深い」と感じられて「重荷」となることであり、いつも家を空けずに居続けることが彼女を見張っているようで（嫉妬深い）と感じられることであつた。お蓮の夫が放蕩によつて妻を苦しめたのとは対照的に時彦は妻に愛情を注ぐ。愛による婚姻とお互いに貞節を守る一夫一婦の夫婦という理想は明治十年代以降キリスト教的倫理の影響を受けて、現行の婚姻制度のもとで不当な忍耐を強いられる女性を救済し解放する方向で盛んになされてきたものである。その中でこそ婚姻制度に苦しめられる女性の物語は小説に描かれるのであり、そもそも可能性の知らされていない所に希望もそれを得ることのできない苦悩も存在しないとすれば、先の理想が喧伝されて希望が与えられたその分、理想と程遠い現状は苦悩の種となり、現実との差に絶え切れない女性は精神を破綻させることもなつた。ところが「化銀杏」ではその極めて緊密な愛と厳格な貞節という理想を夫婦間に求めるのは夫の方である。自分の死に際して共に死ぬような愛情を求める夫はまさしくこの理想の体現者であると言える。（私の方か

ら、良人になつて下さいと、頼んで良人にしたものなら、そりや何様ことでも我慢が出来るし、些少も不足のあるもんどやあ無いが」という言葉があることから、お貞は自身の不幸の原因を家の都合で婚姻の相手が決められたところにあると感じていようだ。その意味ではお貞にも婚姻制度の犠牲となりその苦悩に耐えかねて犯罪を犯した女性という位置付けが与えられている。しかし、苦悩の原因は相手の選択の自由を奪われていたというところにあつたのだろうか。相手の選択といふ最初の行き違ひの後には夫は愛情をもつて妻に臨んでいる。にもかかわらずお貞は苦悩を抱え込んだ。苦悩は二人の性格が相容れないものであつたという彼らの個人的な事情に由来するのだろうか。

お貞の苦悩は先に見たように、時彦の愛情が少なくとも彼女にとつては望ましいものとして通わず、非常に独善的な、精神的に負担を強いるものとなつていたところから起つていよう。夫が新しい理想の体現者であつてみれば、ここには解放を目指したはずの理想がすでに新たな苦悩の原因となつていようという皮肉な状況が描かれていることになる。旧来の婚姻制度から女性を解放することを目指したはずの理想を實踐する夫を持つてなお苦悩は消滅しない。現行の婚姻制度の下で女性が忍耐を強いられることに問題を感じながらも、流布している理想とその流布の仕方によつては解放されない女性を描いているのだ。「化銀杏」に先行して婚姻による女性の不幸を扱つた作品が多く書かれていたことを考えれば、そこにはそれらの作品では自らの問題意識を解決できない作者の思いを見て取ることが出来るはずだ。作品の多くを占める芳之助を相手にしてのお貞の言葉は、彼女の苦悩が妻の苦悩として予想されるものとは全く異なることを説明するために費やされることになる。

お貞の悩みとは、時彦の過大な愛情の要求が負担となることに加え、娘が死んだのは夫のためだとして敵だと思つたため、また貞淑を求める夫によつて芳之助への恋情がかなわなないものとなつていようため、夫が「死ねば可い」といふ思いを抱え込んでしまつたことである。そ

してそのことを「何たる恐しい了簡だらうと、心の鬼に責められ」ることなのだ。しかし彼女の悩みはそこに留まつてはいない。彼女を本当に苦しめていたのは、さらにそれが「人に見付かりやしまいかと、左様思ふから恐怖んだよ」といふことなのだ。夫を抹殺したいという思いを抱え込んでしまひそれがどうしても拭きできないというのは、妻の精神を破綻させるのに十分な理由であるだろう。だが彼女はそれに続いて思いが夫にも他人にも知られてしまふことへの恐れを訴えている。病床にあり死を覚悟した時彦によつてお貞は「死ねば可い」と願つていたことを言い当てられた。その時彼女は「殆ど狂せむとせり」といふ状態である。しかしその直後には死を願つていたことを認めた上で言い訳をしないと毅然と言ひ切つていよう。その時の表情は「両の瞳の曇は晴れつ。旭光一射霜を払ひて、水仙忽ち凜とせり」となつており、眼の曇りが晴れたという描写を何事かからの解放の表現と捉えれば、ここで彼女はひとまず苦悩から解放されたのである。夫に心の内を暴かれることによつて嫌悪が消えてなくなるのだろうか。そう願つていたことへの罪悪感が軽減されるのだろうか。この時彼女から除かれたものは「人に見付かりやしまいか」といふことであるはずだ。ここから彼女を苦しめていたものは夫を抹殺したいと思ふことへの罪悪感であつたよりは、その思いが露顕することへの脅えであつたといふことがわかる。だからこそ夫に言い当てられることで彼女の悩みは一旦は解消されたのである。

しかし夫は次に「世間」といふことを持ち出したため、解放された状態はすぐに途絶えてしまふ。思いの世間への露顕は即ち世間体を失ふことを意味する。「死ねば可い」といふ思いを抱え込んだこととその露顕に怯えることのリアリティーを考へる際に、彼女の語つていよう世間による圧迫を軽視してはならない。家のために結婚をしたお貞は「女の道」といふ通念とそれを強いる「世間」とに對して不満を語つていよう。「些少あ彼でも愛嬌があるよ」「何處がといつちやあ返事が出来な」といふ程の夫に對して嫌悪がどうしても湧いてきてしまふのは、

その不満を「世間にや勝たれないから」「世の中といふものがあつて、自分ばかりぢやないからと、断念^{あきら}めて」として抑圧しているために、それが直接の対象である時彦への嫌悪として表現されていると考えることができよう。そして夫との関係を嫌うにしても、自分を抹殺するのではなく夫を抹殺することに向かうのは、世間での自分の占める位置を失いたくないという思いが働いているためと解釈できる。極論を言えば彼女はこの婚姻関係から逃げ出せばよかつたのだ。逃げ出すこと、つまり世間での自分を失うこと、それができず現在の位置を維持したままで関係の解消を願つたからこそ思いは秘密裡の夫の抹殺へと向かつたのである。露頭を恐れることと、夫の死を願うことは世間に対してと同じ根に発している。世間体と切り離されたところにお貞の煩悶があつたわけではない。社会の把握は世間という曖昧な形に留まっているが、この作品の展開の基盤には社会による個人の抑圧という図式が置かれている。

お貞の場合、親戚の者による相手の選択という最初のボタンの掛け違えは確かに現行の婚姻制度下で劣位におかれていた女性に特有の事情であつた。しかし、その後の世間に対するという点では、女性であるためのというのではなく、人がその抑圧の中でどの様に考え得るかに作者の関心は移つているように思われる。作者は解放を願つて流布した新しい婚姻観ですらすぐさま新たな抑圧の原因となつていくことを感じ取つていたのだから。

そして、時彦の自分を殺せという要求こそ、世間に対するこの根本を覆せというものであつた。お貞が世間を捨ててを可能にしたものは何であつたのか。お貞が夫を殺すことについては例えば以下のよ様に説明されることがある。お貞は内心に漠然と抱えていた不満や嫌悪を芳之助を相手に語つた。協明子はここでのお貞の語りを西欧的な幻想小説の方法、つまり「主体の意識を擾乱におとし入れ、感覚を異常な点にまでひきあげる」「主体の偏執的な語り」と同様の試みであるとして、この語りに「現実を変容して幻想の論理に従わせてゆく力」

「現実の外へと飛翔していく方法」³⁾を見ている。芳之助に語る内に「長い述懐はおさえきれぬ呪いとなつてただよいはじめ、もはや彼女の意思をこえて働きます」のであり、思いは語ることで「死ねば可い」という抑えきれない呪詛となつて一人歩きをし彼女を苦しめるのである。「死ねば可い」という呪詛は彼女から生み出されたものであつても彼女の意志の及ばないものとなつている。夫殺しはその抑制の効かない呪詛に突き動かされてということになる。

時彦を刺す時お貞は幻影に苦しめられており、それは「奇異なる幻影眼前にちらつき、燦^{はげ}と火花の散る如く、良人の膚を犯す毎に」と描写される。その時の様子はかねてより彼女が「時々神経に異変を来し」た時と同一とされているので、芳之助との会話の中にあつた（一人でのを考へてる時は、頭の中で、ぐる／＼／＼／＼、（死ねば可い）といふ、鬼か、蛇か、何ともいへない可恐^{こは}いものが、私の眼にも見えるやうに、眼前に駈まはつて居るもんだから）という症状と等しいと考えられる。鬼とも蛇ともつかない奇異な恐ろしいものが夫を襲う、これが夫の床に付き添うお貞が見て苦しんでいる幻影であつた。勝手許から刃物を持ち出して刺したという彼女の夫殺しとはこの脳裏に渦巻く幻影を実行したこともあるのだ。その意味では彼女は「幻想の論理」に従つて「現実の外へと飛翔」したといえるのだから。しかしそれは語ることにのみによつてもたらされたのだろうか。この幻影は芳之助との会話以前からお貞を苦しめていたと告白されているので、「死ねば可い」の思いは語ることによつて生み出されたものではないと反論することも可能であるが、それ以上に夫殺しを語りから直接結びつけることは、この後の展開を等閑視することになる点で疑問が残る。語ることによつて思いが呪詛とまでなつていたとしてもそこから夫を殺すまでには時間が大きく隔たつている。芳之助との会話は夏の設定であつたが、夫を看病する内に季節は秋から冬へと移つているのだ。その間呪詛は彼女を苦しめ続けたとしても、この隔たりは彼女を駆り立てたものがそれだけではないことを示しているのではないだろうか。

お貞は（幾年来独り思ひ、独り悩みて、鬱積せる胸中の煩悶）を初めて人に打ち明けたわけで、思ひは確かに芳之助に語ることで頂点を迎える。「語ることはカタルシスになるらしいが」と脇も引き合いに出す通り、芳之助を相手にしたお貞の激昂した語りは、たとえば告解の場で信徒が司祭に向かって自身の罪を、心理療法の場で患者が分析医に向かって自らの内心の苦悩と衝動とを告白するように、彼女に浄化をもたらすのではないかと解釈を試みたい誘惑を持っている。しかしお貞の「死ねば可い」という思ひは告白によって消滅することはなくさらに高まっていった。そこから脇はここに彼女をカラストロフに導く語りを読み取る。呪詛という本人の意志を越えた無意識の領域を想定していく。告白のような神経症の治療に類するものでは解決の着かない何かを見て取るのだ。しかし、芳之助は司祭が神の代理であるようにはお貞にとって絶対の存在、抑圧の根源ではなかった。それに告白したからといって抑圧は解けず、心の解放や思ひの消滅は起こってこない。先に彼女の苦悩の原因、抑圧を与えていたものとして世間があるとした。この思ひは意志の力では消し去ることのできないものであるとしても、そこに呪詛を想定する前に、いかにこの世間に対していたかを確かめておきたい。夫の病床に付き添うお貞に起こっているのは、この点に関わることなのである。

世間に対するということを考えた場合、お貞と芳之助の会話が、世間とは交わらない、いわば自閉的なものだということに注意したい。「化銀杏」は半ば過ぎ、時彦が病み付くまで主にお貞と芳之助との会話によって進められている。会話の中でお貞が自らの心の内を芳之助に訴えている間、語っている内容に関して彼女の言葉以外に説明が加えられることはない。時彦の人物像や夫婦関係など、全ては彼女の言葉によって知らされている。このようにお貞の解釈のみが伝えられることは会話の相手である芳之助が彼女の解釈を肯定し続けることによつて可能となる。実際芳之助はお貞の打ち明け話に異を唱えることはない。夫を恐れてもいないのにどうして怯えるのかと尋ねはするも

の、それはさらに進んだ告白を引き出すものでしかなく、夫を「死ねば可い」と思っている、通常打ち明ければ非難されてしかるべき心情を明かした後にも、その思ひに苦しめられていることをかわいそうだとするのである。芳之助が時彦を嫌う理由は、放蕩によつて最愛の姉を自殺に追いやった義兄と似ているその髻について「あの髻が嫌だからだ。何だか虫が好かなくツて」というものである。嫌悪の理由は似ているからというものであり、嫌悪のあり方も「何だか」というところに留まっている。この際、お貞の嫌悪も「何だか旦那が嫌になつた」と表現されていた点に注意したい。もともとお貞の夫への嫌悪は、幼くして死んだ娘、環の父親への嫌悪を受け継ぐことで自覚されたものであった。娘が「父様が居ないと可いねえ」と繰り返すのを聞いて、「つい私もね、何だか旦那が嫌になつた」のである。環はお貞が「妾に気が詰まつて」（窮屈で、つまらなくツて）という程に感じていた夫への漠然とした違和感に「父様が居ないと可い」という具体的な像を与え、彼女の抑え込まれていた胸の内を顕在化させたのだと解釈できる。この三者は時彦への嫌悪が「何だか」というあり方を持っている点で相似といえる。お貞の嫌悪は娘の言葉によつて形作られ、芳之助の助長によつて高じてきた。彼女の嫌悪はこれら等質の感性を持つものの中で作られることによつてこそ、このように高まっていくことが可能だったのである。

ところで、次の部分はお貞の伝える時彦像に亀裂を生じさせている。だから、西岡は何でも一方に超然として、考へて居ることがあるんだらう。えらい！といふ者もあるよ。

これは時彦についての学生たちの評判である。ここには時彦の実像がお貞によつて解釈されて伝えられたものとは大きく隔たる可能性が示されている。これはお貞に時彦観の見直しを迫るはずのものであるが、彼女は即座に間違っていると断定してしまい以後省みることはない。またこれは読む者にとつても彼女の語る内容に相対化の機会を与えるものであるが、この断定にはお貞から「考へてるツて、大方内のこと

ばかり考へて、何をしても手が附かないで居るんだらう」と言われる以外に妥当な根拠が示されておらず、その真偽はわからないままに彼女の言葉を読み進まざるを得ない。作者はここでお貞が自らの時彦像を見直す可能性を敢えて断っていることになる。学生たちの声を入れることで、お貞の訴える不幸がこれら等質の感性を持つものあいだでしか成り立たないということを強調する結果になっているのである。

その意味でこの学生たちの評判は、弦巻克二が「ねむり看守」において指摘した「語りに対する他者の視線」と同じ位置にある。「ねむり看守」には、労役の合間に看守の話を書く囚人たちを猟に遊ぶ紳士が通りすがりに見かけ、すぐに面を背けて遠くを見遣り、子供に向かって長じて彼らのようにならないことを諭す言葉を言い捨てる場面が挿入されているが、弦巻はそれを指して

此作の場合、看守と囚人の群と、それを外部から眺める他者の視線とは全く没交渉であつて、寧ろ看守の物語を無効化するようにならぬ描寫されていないのである。

と指摘する。学生たちの評判はお貞の「物語を無効化」するという点でこれと同じ位置にあるといえる。「化銀杏」では学生たちの評判によつてお貞の時彦観は揺らがなかった。「ねむり看守」で他者の言葉が看守と囚人たちに届かなかつたのとは異なりお貞に伝わっているのに一顧だにされず、彼女は自らの作り上げた物語を相対化することを拒む。「物語を無効化」する機会は周到に摘み取られ、自閉性はそれだけ徹底して描かれているといえるだろう。

お貞と芳之助との会話は二人の恋情が高まろうとするその寸前に時彦の帰宅によつて妨げられている。時彦はこれから病の床につきお貞は看病に専心し、そこで夫の死を願つていた思いを当の夫から言い当てられた。時彦に言い当てられることは芳之助との会話の中で作り上げられたお貞の不幸の物語が破られることを意味する。死に臨んだ床の中で彼女の思いをとうに見抜いていたと言いきそれを責める時彦の洞

察力は、彼女がこれまで知らせてきた彼の像とはほど遠い鋭さを持つ。先の学生たちの高い評価が妥当であったのかもしれないとすら思わせるものである。お貞の不幸の物語は他者の言葉を受け付けられないことと出来上がつていたわけだが、ここでは言い当てられることによつて閉ざされた中で物語が維持され続けることを許さない展開となっているのだ。そこにはお貞の語る不幸の物語が、彼女とその等質の感性を持つものだけにしか通用しないものであることへの作者の覚めた認識を見て取ることができ、作品はそれを表現するための効果的な、計算された構成を取っていると考えることができるだろう。

百川敬仁は時彦がお貞の思いを言い当てることについて

ところが、妻のそうした内心の裏切りをとつてに見抜いていた夫は、死の床で、他人の目をあざむこうとする妻の狡猾さをするどく非難する。良心の呵責にたえかねた妻は、ついに夫を殺害し発狂した。——これがおおよその筋だが、わたしたちが見逃してはならないのは、自己欺瞞の心理に対する作者の異常なまでの、ほとんど病的に過敏だとさえ感じられる倫理的なまなざしである。³⁾

とし、作者の「自己欺瞞への偏執的なまでの批判」を捉えている。お貞は自分の殺意を凝視したからこそ苦悩したのであり、欺瞞は「自分のみにくい真実を見まいとする心理」（他人の目をあざむこうとする）狡猾さという能動的なものではなく、状況が彼女をそこに追いやったものと捉えるべきだと考えるが、お貞が芳之助との閉じた中で物語に溺れて不幸をかこつことは確かに欺瞞であり、百川の指摘する通りここには鏡花の徹底した批判を見ることが可能である。お貞に「世間にはや勝たれないから」と言わせる時、作者は彼女の苦悩の原因である世間に対しての批判を込めている。その一方で世間の抑圧のためとはいえ彼女が結果的に世間を欺いていることを許してはいない。

そして、だからこそ、作者はお貞の否を暴き批判する側のみ立っていたわけではない。百川はお貞の犯行を良心の呵責に耐えかねてのものとし、脇はお貞の語りの内に彼女の夫殺しと発狂の原因を捉え、

思いを抱くこととその露頭から夫殺し、発狂までを一連のものとして見ている。しかし、この部分の展開で意外な感じを受けるのは、欺瞞を批判されることよって、つまり内心を暴かれて不幸の物語が崩されることよって、お貞の精神は崩壊しなかつたということである。先に見たように、夫に言い当てられることとお貞は一旦は解放されているのだ。時彦に言い当てられた後、世間に関してこの二人の発想は奇妙な一致を見せている。夫は死ねばいいと願っていた負債を返すために「離縁しよう」「姨捨山へ捨てるんだ」と要求しておきながら、それに続いて「世間体」を知っているからできない相談だと退けており、お貞も「一思案にも及ばずして」即座に拒絶し、その時には夫も「然もこそと思へる状」である。世間は捨てられないという点でお貞と夫とに行き違いはない。世間を失うことはできないということに関して時彦はお貞を理解し、死を願っていたこと、それを隠していたことは責めても、世間を恐れることを責めてはいない。二人ともにとつて世間は捨てられないものとしてあつた。そしてお貞が「死ねば可い」と呪っていたことについてはそれに見合うだけの罰が必要だとする時彦の言葉にも彼女は合意する。時彦の病はお貞の呪いのためのものか、衛生髻の用心にもかかわらず結核に冒されたのかはわからない。いずれにせよ病床にある夫は死を免れ得ない設定である。その上で時彦はお貞に自分を殺せと要求する。自らを殺せという要求は世間を失わせお貞を裁く方法ではあるが、一方、自分の死後もお貞を自分のために拘束する手段として彼女の手で殺されること、彼女を犯罪者とすることを選択したということでもある。そしてお貞は時彦の「殺せ」という言葉に促されるように実行に及ぶ。お貞はその望みを引き受けたということになる。これらの共通の了解の上でこそ「死ねば可い」の思いは実行され夫殺しという結末は招かれるのである。その意味ではお貞の夫殺しは合意の上での心中である側面を持つ。夫を刺すその瞬間までお貞は「死ねば可い」の思いから逃れられず、かつ夫の論理に沿ってみればこれ以外に選択する道のないことを考え続けていたに違いない

のだ。それに続く発狂は最後まで世間から離れることのできなかつたお貞が死以外にそれを逃れられる手段でもあつた。いや犯行の後にもなお「世の人に良人殺しの面を見られむを恥ぢて」暗い部屋に引きこもっているのだから、その言葉を信じれば今も世の中の呪縛からは逃れていないのかもしれない。発狂は少なくとも狂人であるとして裁判の場で世間の人々の眼に晒されることから免れ、世の中から離れて隠れていることを可能にする。その意味では作者からの救済であると言えよう。作者の視線はお貞を断罪するのみでなく、彼女がその思いを抱え込まざるを得なかつた原因にも、むしろそこにこそ及んでいるのである。

「化銀杏」のお貞の発狂は、鏡花が観念小説的な作風から浪漫主義的なそれへと移行する、その契機となる出来事として捉えられてきた。弦巻は前掲論で

つまり「ねむり看守」に孕まれている他者の視線を断念することよって初めて「高野聖」の世界は成立するのであつて、換言すれば、他者を切り捨て、看守と囚人の群という自閉性の中に限定されたのが「高野聖」の世界であつた。

と鏡花の作風の転換を跡付けている。「化銀杏」はその他者を切り捨てる過程の中に位置付けられ、お貞の発狂は他者への架橋の不可能を証明し、作者のそれへの「絶望感」を示したものとされる。作者は他者の視線を断念したところにか物語は成り立たないと気付き自閉性の中で物語を書き始めると解釈する。また脇も前掲論において、語りが錯乱に終わったことを指して

こうした語りの行きつく先の錯乱と死を、鏡花は見抜いていたのかもしれない。「化銀杏」が示した方向へ進むかわりに、彼が再び物語に戻ってきたのは、そのためではなからうか。

としてお貞の発狂を鏡花の望まないものとし、これ以降幻想の物語を書くことになる転換点として位置付けている。

しかし、これまで見たようにお貞の発狂は彼女を断罪するものでは

なく、時彦との越えられない断絶を端的に示すものではない。両者の対立を引き起こす世間にまで意識を及ぼした時、さらに大きな対立物に向かって両者は協調しているのだ。同じく明治二十九年発表の「X 蠅螂蝮鉄道」⁽⁶⁾には、妻が我が子を殺してしまいたいという思いを抱え込み、それを尋ねてきた友人に言い当てられてしまうという類似した展開が見られるが、ここでは夫婦は見る影もなく零落して住まいを変えており、すでに彼らを取り巻く世間というものを失っている。「化銀杏」では同じモチーフが世間を捨てられない女性のものとして扱われており、その結果は二人の変則的な心中に終わった。お貞の語り以後の一人称の幻想小説へと繋がる要素を指摘することは正しいが、作者は語りだけではこの小説を終わらせなかった。言うまでもなくこの作品は観念小説的作風の末期に位置するわけで、お貞の語りでは社会、世間と個人との関係が扱われて登場人物の激烈とも生硬ともいえる信念が開陳されていた。そしてそれに続く部分には世間の抑圧の中で妻が夫への殺意を抱え込んだこと、自閉的な物語に溺れたことへの作者の批判も、同情も認めることができた。この夫婦に心中の側面を認め得るとすれば、断絶はむしろ一度はお貞との自閉的な世界に居ながら彼女が時彦の希望に従ったためにとり残されて、二度と姉に似た女性に逢うことの出来ない芳之助とお貞との間にこそ見るべきであろう。

(1) 泉鏡花「化銀杏」明治二十九年二月〔文芸倶楽部〕第二巻第二編 博文館

(2) 「化銀杏」における「世間」の重要性については既に東郷克美「鏡花の隠れ家」〔異界の方へ―鏡花の水脈〕一九九四・二 有精堂の指摘がある。

(3) 協明子『増補 幻想の論理』一九九二・一一（沖積舎）

(4) 弦巻克二「『ねむり看守』」一九九一・一一〔論集泉鏡花 第二集〕有精堂

(5) 百川敬仁「水『プレロマン』作品群の定位と水のモチーフ」一九九一・八

〔国文学 解釈と教材の研究〕学燈社

(6) 泉鏡花「X 蠅螂蝮鉄道」明治二十九年二月〜三〇年四月〔江湖文学』第二号〜第五号 江湖文学社

(7) 拙論「泉鏡花『X 蠅螂蝮鉄道』論——鉄道の意味するもの——」

〔群馬県立女子大学紀要〕第二二号 参照

〔化銀杏〕の引用は岩波書店版『鏡花全集』による。引用にあたっては旧字を新字に改めルビを取捨した。）